

立山室堂北斜面における植生と消雪の関係および融雪特性

○杉浦幸之助（富山大）・初見紗織（富山大）・和田直也（富山大学）

1. はじめに

立山室堂周辺は尾根や谷が多く分布しており、植生がモザイク状に分布している。先行研究では、植生調査が実施され、立山室堂の南方に位置する室堂山の北向き斜面では、地温を測定して植生と消雪の関係が考察された。そこで本研究では、室堂山の北向き斜面で融雪期から消雪まで実際に積雪観測を実施して、植生と消雪の関係を調べ、さらに観測地の融雪量も求めたので報告する。

2. 観測方法

本研究の対象観測斜面には、既存の50点の観測点が存在している（東西約200m、南北約400mの範囲。斜面下方から上方へ標高差約150m内に5測線。1つの測線は10m間隔の観測点を10点含む）。観測期間は、融雪期から対象観測斜面の雪渓が消雪するまでであり、観測回数は合計6回（2015年6月2日、6月24日、7月14日、7月31日、8月11日、8月27日）である。小型GPSにより50点の観測点を確認し、測深棒で積雪深を測定した。また、神室式スノーサンプラーを用いて、代表する1地点で積雪水量を測定した。

3. 結果と考察

対象観測斜面の植生の優占種は、ハイマツ群落、イワイチョウ・ショウジョウソウゲやチングルマといった雪田群落、礫地に低密度で分布するヒロハノコメススキ群落の3つに大きくわけることができる。植生と消雪の関係を見てみると（図1）、ハイマツ群落が一番早く消雪し、続いて雪田群落、そして礫地が最も遅く消雪していた。礫の地点は土壌攪乱がおきていて、植生にとって好ましくない環境であったと考えられる。

また、本観測で求められた融雪量は観測点によって異なったが、先行研究の融雪係数を用いてデグリーデ一法で算出した融雪量とを比較したところ、本研究の融雪量は先行研究と比べて少なかった。これは、観測地点が北斜面のために日射量が少ないことや、積雪に不純物が多く含まれると融雪が促進されるがその影響が小さかった可能性などが示唆される。

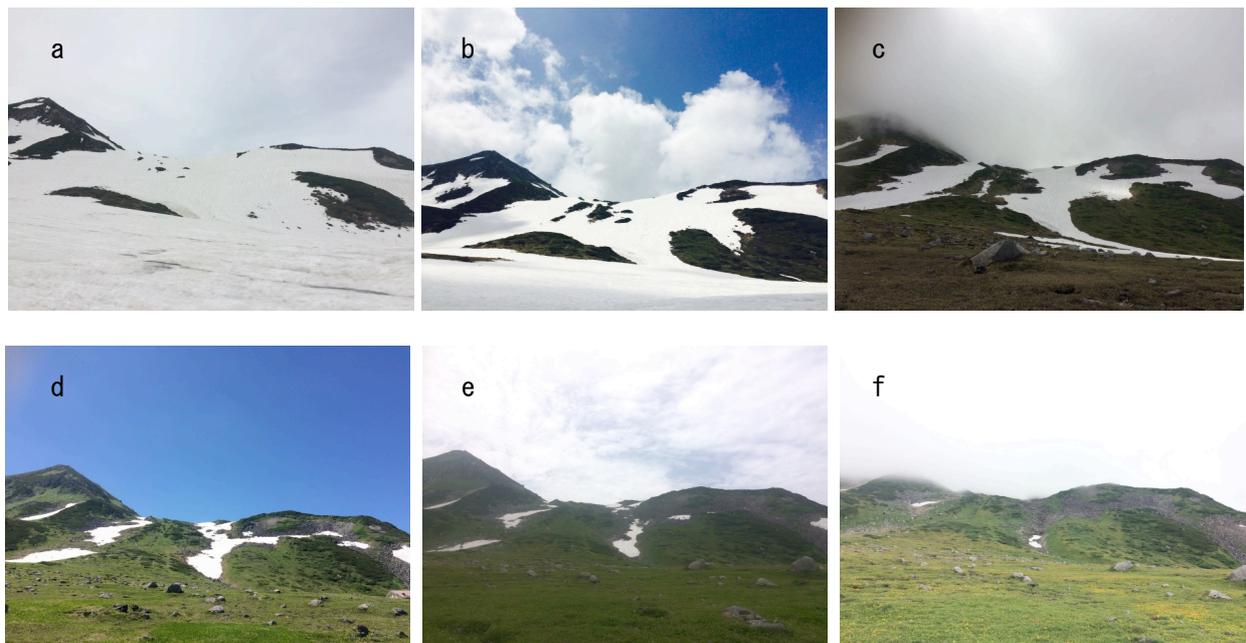


図1 対象観測斜面。a：2015年6月2日，b：6月24日，c：7月14日，d：7月31日，e：8月11日，f：8月27日。